



慶應義塾大学ビジネス・スクール

ケース メソッドについて

高 橋 吉之助

経営者セミナーがケース・メソッドを紹介

我が国で経営者教育の口火が切られたのは戦後、それも昭和31年のことであろう。その年の夏2つのセミナーが開かれた。一つは日本生産性本部がシカゴのノースウエスタン大学経営大学院の教授およびシカゴの財界人を講師として箱根に催した「トップ・マネジメント・セミナー」であり、他の一つは慶應義塾大学がハーバード大学経営大学院の教授を招いて伊豆の川奈に開催した「第一回慶應ハーバード高等経営学講座」である。10

この二つのセミナーは我が国における経営者に対する専門的な教育の嚆矢となつたばかりでなく、そこで「ケース・メソッド」という方法がともに用いられたことも注目されたところである。15

一体ケース・メソッドとはいかなるものか。その所謂「ケース」とはどのような内容のものか。経営者教育にケース・メソッドがなぜ用いられるのであろうか。

第二次大戦の前夜から戦中にかけてアメリカの産業界の当面した多くの問題の一つに会社の上級ならびに中堅幹部の養成および再教育の必要という問題があった。産業界のこの必要に呼応してその充足に協力したのが、諸々の大学の経営大学院 (Graduate School of Business Administration) である。それらは相次いで会社幹部のための公開講座を設けてこの教育を受けたのである。集ってきた連中はみな会社のいずれかの部門で長年苦労してきたエキスパートである。テキストに書かれてあるような抽象的なことを講義されても眠気を催すか反感をそゝるだけである。問題はいま彼等の会社が当面している事態に幹部としてどう対処し、どう切り抜けて行くか、そのやり方を学ばせねばならない。25

数ある大学院へ幹部あるいは幹部要員を次々に派遣している諸会社の間でようやく評判になったのは、ハーバード、スタンフォード、ノースウエスタン等の大学院の講座を修めてきた者が高度の経営能力を發揮するということである。調べてみると、これらの大学院は他と異なった特殊の教育方法を共通に採用しているという事実が判明した。俄かにその教育方法が産業界および経営教育に関係する人々のひとしく注目するところとなつた。30

これこそ、ほかならぬ「ケース・メソッド」と呼ばれるものである。経営者を養成し経営者を再訓練するのに現在アメリカで最も効果を挙げている教育方法のひとつがこれである。

だから「ケース・メソッド」と言っても、学問研究の方法でもなければ、社会学でいう対象調査の方法でもない。それは、従来の講義方式 (レクチャー・メソッド) と並ぶ教育35